

[緊急対談「私の

理想の死に方】

「安樂死したい」と公言する作家

在宅で1000人以上の尊厳死を看取った医師

筒井康隆×長尾和宏

家で穏やかに死んでゆく方法

この国で本当に「安らかに、楽に死にたい」と思った時にまずすべきこととは一体何か?

日本で「死に方」の議論が過熱している。これまでタブー視されてきた「安樂死」の「解禁論」も叫ばれ始めた。作家・筒井康隆氏(82)が、月刊誌『SAP-IO』(小社刊)に寄稿した論考「日本でも早く安樂死法を通してもらおうしかない」(17年2月号)も大きな反響を呼んだ。

この論考に注目した、日本尊厳死協会副理事長の長尾和宏医師(58)の要望で、終末期医療と尊厳死、安樂死を巡る二人の対談が実現した。

もはやタブーではない

筒井先生は、「SAP-IO」の論考で「苦痛を和らげる薬を貰いながら死にたい」と主張されました。

長尾 私は町医者ですが、日本尊厳死協会の副理事長をしていまして、先生のような作家の方に終末期医療についての議論を喚起する論考を書いていただき、非常にありがたく思います。

筒井 いや、我々の業界では、安樂死というテーマはタブーでも何でもない。むしろ、日本では認められないから、議論することが無意味だという風潮になっています。

長尾 「SAPIO」で安樂死したいと書いて、ご家

長尾 作中では老人ホームの入居者もバトルに参加させられる。個室の鍵が開けられて殺し合うんですね。

筒井 私は老人ホームに入れられたら、1日でボケまですね。つまらないお遊戯はさせられるわ、ゲームはさせられるわ、すぐにボケますよ(笑い)。そんな死にはまっぴらです。

長尾 いまも、酒もタバコもたしなまれているそうですが、これまでに大病をされたことは?

筒井 何十年か前に胃潰瘍をやりました。あのときはしんどかった。『文学部唯野教授』と『パブリカ』を同時並行で連載してたんですよ。締め切りが一つ終わったら、もう次の締め切りと交互に来るから、胃に穴が開いていた(笑い)。

長尾 それ以降は大病をされていないんですね。

筒井 それは、もちろんありますよ。作家だからいろ

ポストを読んで深く考えてほしいね

長尾 先生ご自身は、理想的死に方ってありますか?

筒井 15年くらい前に、自分が死んだという想定で、著名人が架空の死亡記事を書く『私の死亡記事』といふ本が文藝春秋から出て、私も書きました。杖をついて原宿を歩き回り、気に入らない若者を杖でぶん殴つていたら、最後は若者たちの返り討ちに遭い、袋だきにされて死ぬと。若い頃はそんなことを書いたんだけど、やっぱり痛い目に遭うのは嫌(笑い)。

長尾 袋だきにされても、そう簡単に死ぬとは限りませんからね。

「家族の反対」「医師の日和見」「看護師の密告」そうした「壁」がある中で、「苦痛をやわらげる薬を貰いながら死ぬ方法はないのか?」と問う筒井氏に「それが、あるんです」と長尾氏が応じた――

長尾

当事者として書いた。

筒井 そうなんですよ。だから、やっぱり一番理想なのは、安樂死が法制化されることなんですね。

長尾 いや、私は安樂死に反対ですよ。ところで先生の最期はがんを想定されていますか? 認知症ですか?

筒井 認知症にならない自信はありますね。MRIで脳を診てくれたお医者さんが、「少なくとも90歳まで脳は大丈夫」と太鼓判を押してくれた。

頭ははつきりとしているのだから、やはり安樂死がいい。がんにしても、尊厳死だと苦痛が伴うこともある

対応は6割くらいで、家族への対応が仕事の4割です。長男と長女で意見が違ったり、叔父さんが口を挟んだり、家族の意見を調整して、家族のために延命治療をやらされることもあります。筒井 在宅医療というのは大変でしょうね。

長尾 「銀齧の果て」は、国の将来を案じて書かれたんですか。

筒井 いやいや、そんなことはないです。あの頃、藤原竜也主演の『バトル・ロワイヤル』という映画が話題になっていただけ。

長尾 本を読んで、とてもリアルな物語だと感じました。実際に、親の介護のために会社を辞めたり、人生を諦めたりしている人がたくさんいて、それが美德とされている。「ほんまにこれでえんかいな」と思うときがあるんですね。

筒井 だから、老人に殺し合いをさせる話のほうがアリティがあるし、薄汚いし、醜いしで、面白くなるの(笑い)。

